

本田洋著

『韓国農村社会の歴史民族誌——産業化過程でのフィールドワーク再考——』

風響社 2016年 486ページ

くらもち かず お
倉 持 和 雄

I

この書評で取り上げる本田洋著『韓国農村社会の歴史民族誌——産業化過程でのフィールドワーク再考——』は1980年代末、韓国の一農村において著者が行った文化人類学的調査を主軸とし、過去の民族誌、文化人類学の先行研究と比較対照して、産業化過程のなかで農村社会、とりわけ家族、村落の再生産のしかたに生じた変化を課題とした研究成果である。評者のわたしは、韓国の工業化によって韓国農業構造（農地関係、農業労働力、農業生産、農家経済）がどのように変化したのかを、『現代韓国農業構造の変動』（御茶の水書房、1994年）という一書にまとめたことがある。わたしのディシプリンは経済学であり、文化人類学については門外漢である。しかし、わたしが評者に選ばれたのは、わたしと著者との間に、韓国農村を対象とし、1980年代を主たる対象時期とし、産業化による農村社会の変化に関心を持ったという共通点のゆえだと思ふ。しかし、わたしの論評は著者の文化人類学的アプローチに即した論評でなく、自身の専門に引き付けたやや偏った論評になってしまうことを予め断っておきたい。本書の章立てをまず紹介しておこう。

まえがき

序論

I部 農村社会の長期持続とYマウル住民の生活経験

1章 小農社会の社会単位としての戸と村落

2章 在地土族の拠点形成と地域社会——南原の土族とYマウルの三姓——

3章 植民地期の農村社会——南原地域とYマウル——

4章 農村住民の近代／植民地経験——移動と教育を中心に——

II部 農村社会における家族の再生産と産業化

5章 農村社会における家族の再生産——対照民族誌的考察——

6章 産業化と再生産条件の変化

7章 家族の再生産戦略の再編成

III部 産業化と農村社会

8章 産業化と村落コミュニティの再生産——対照民族誌的考察——

9章 孝実践の諸様相——門中とサンイル——

結論

あとがき

以上のようにIII部構成で、序論と結論を含めて11章からなる大部の著作である。以下、章ごとに内容紹介を簡単にしていこう。ただし、紹介はあくまでもわたしの理解によるものであることを断っておく。

II

序論。ここでは調査村Yマウルの調査当時（1989年）の概況を紹介し、民族誌的先行研究をたたき台として著者の問題関心の中心である農村社会における家族と村落コミュニティの再生産過程について仮説的な枠組を提示する。すなわち先行研究を批判的に検討して、①家族の再生産について長男相続が理念型のように見えるが、祭祀権の長男継承は堅固に維持されても農家経営では状況により必ずしも長男継承でない柔軟さがありうること、②村落コミュニティの再生産も共同性を自明の前提とはできず、村落固有の諸条件に依存するところが大きいこと、という2つの視点を提示している。

1章では、朝鮮時代後期の農村社会に関する歴史人類学的研究および社会経済史的研究を踏まえ、農村における居住・生計、生産の基本単位である戸と互助・共同の諸関係を取り結ぶ村落の再生産について以下のように結論する。家族・戸の再生産は一義的でなく、①トバギ士族（土着した両班）地主、②

小規模自営農、③零細・小作農の3類型が見られること、村落の再生産の特徴として、①比較的对等な互助・共同と相互規制の共同性と、②位階的諸関係とが交差しており、村落コミュニティの性格は、具体的な生活と生産活動の諸状況によって幅があることを示す。

2章では、調査村が位置する南原地域とYマウルにおける在地士族の形成を論ずる。南原には名門五姓と呼ばれる朔寧崔氏、豊川盧氏、全州李氏、順興安氏、慶州金氏が、早くは15世紀後半、遅くとも16世紀半ばに定着した。Yマウルの在地士族は以下に述べる三姓が支配的だが、もっとも子孫が多い彦陽金氏が15世紀後半、これに次ぐ広州安氏が16世紀末、最後に恩津宋氏が17世紀末から18世紀前半に移住してきたと考えられる。Yマウルの三姓は、南原五姓に比較すると在地士族としての身分や威信が高くなく、経済的にもせいぜい小地主、多くは小規模自営農であった。

3章では、植民地期の行政資料と村落文書によって南原地域とYマウルの1920～30年代の人口変動、農村経済、そして洞契を基盤とする村落の互助・共同的活動を以下のように論ずる。南原郡の人口動態からは営農基盤が脆弱な地域ほど流動人口比率が高かったと推測できる。同郡の農村経済はYマウルが位置する全北道の状況から見て、大半を占めた自小作と小作農は全国平均に比べて生計基盤が不安定であり、生計維持困難を理由とする離村が見られた。Yマウルではこの時期に洞契が組織され、村落の生活・環境整備や植民地権力による動員・徴発に共同的に対応していたことが明らかになった。

4章では、Yマウル住民の聞き取りによるライフヒストリー資料から植民地期における日本への出稼ぎ・移住、近代教育の履修を通じた事務・専門職への進出、また解放直後と朝鮮戦争時期における左右の対立時期の経験について論じている。後者の部分は本書の課題の本筋から離れるのだが、この時期、韓国農村社会も政治的に激しいイデオロギー対立の渦中に置かれていたことが実感できるたいへん貴重な証言である。一方、前者の証言事例について著者は、解放後の家族の再生産戦略の変化を考える上で2つの示唆点を与えると指摘する。ひとつは、次三男の移動における自由度の高さが見られた点であり、これは解放後の人の移動と再生産戦略の関係を考

る上で示唆点があるということ、またもうひとつは、富農において近代教育を通ずる事務・専門職への進出が見られた点であり、これは産業化過程で広く農家の社会経済的地位上昇の戦略的選択肢となったことを考える上で示唆点があるとしている。

5章では、産業化以前の農村社会の家族再生産について、植民地期の口述資料、1960～70年代の民族誌資料、そしてYマウル住民のライフヒストリーを用いて実相を考察している。これらの検討から結論的に、保有する社会経済的資源の多寡により、①富農・地主、②小規模自営農、③零細農・貧農の間で家族の再生産戦略において違いがあることを指摘する。長男残留規範に注目して言えば、富農・地主の場合、経済的余裕があるために長男の生家への居住＝経済単位の継承は必ずしも促されない。一方、貧農・零細農は、経済的存立基盤が脆弱なため長男が小作や賃労働のために流浪したり、妻家暮らしをせざるを得なかったり、マージナルな生計維持が優先される様相が見られる。しかし、小規模自営農では貧農より生計基盤はあるが、かといって十分な余裕があるわけではない。そうした中間的な経済基盤の状況で、年長労働力である長男を生家に残留させて経営維持することがもっとも合理的であったと説明する。こうして長男残留規範はこの中間的自営農でもっとも典型に見られた。とはいえ、それは経済的基盤の危うい均衡の上に成立しているに過ぎないと指摘する。

6章では、1960年代後半から1990年までの産業化の時期について、農業経営、農村人口とその構成の変化を全国的な統計と南原郡の統計に基づいて分析、考察している。人口構成の変化については人口センサスを利用してYマウルが属する南原郡およびP面の出生コーホート別人口変動を分析して出生コーホート毎の学歴・教育水準と移動傾向を考察している。ここから次のことを明らかにする。汎コーホートの的には、10代後半と20代後半で人口の大きな減少、20代前半での減少鈍化が見られ、それ以降、30～40代ではコーホート別にばらつきがあり、共通の特徴を見出すことは難しいが、1970年代後半と1980年代後半に大きな人口減少が見られる。この間に農村は全体として人口を減らし、またその人口構成は、幼年・少年・青年層主体から中年・老年層主体に変化した。それは産業化過程にあって、個々

の農家がその子どもたちの学歴・職業・結婚と移住に対して時期や状況による違いを含みながら戦略的選択をした結果の反映だとする。

7章は、産業化によって家族の再生産戦略がどう変化したか、Yマウルを事例として考察している。具体的には向都離村と環流的再移住、結婚、農家世帯編成、農業経営、家内祭祀について詳細に論ずる。著者によるYマウルの調査を存分に活かした部分である。ここで著者は、①農業経営の戦略的意味が経営自体の再生産から向都離村する子女への支援、農村に残った親の自活、または環流的再移住者の生計維持手段に変化したこと（農業経営の道具化・手段化）、②それはかつて富農層に限定されたメリトクラシー戦略が中間的自営農にも拡散したことを意味し、それによって農家経営の再生産と生家の生計維持に長男残留規範の効力が顕著に弱まったと主張する。また③家内祭祀の検討結果から家父長制的関係性が揺らぎはじめていることを確認している。

8章では産業化によって村落コミュニティの再生産がどう変化したかについて、Yマウルを事例に論じている。具体的には農作業における互助・協同、村落の共同参与活动と洞契について考察する。結論的に、①農作業での互助・協同はモラル・エコノミー的感覚と経済合理的判断の均衡によって成立している不安定なものであり、②村落の共同参与については、参加の任意的な酒食の親睦（スルメギ）や強制性を伴う喪葬時の相互扶助としての喪扶契があるが、いずれも不参加者が目立つなど、存立が揺らいでいることを指摘する。

9章は、産業化を経て父系親族団体（門中）の組織と諸活動、祖先の墓の整備作業（サンイル）がどう変化しているか、Yマウルにおけるこれら孝実践の現実を考察している。門中活動の中心である墓祀は、その正統な方式による儀礼は守られているが、向都離村者の増大の結果、参加者の大幅減少に伴う簡略化（墓前から室内への移行、供物の縮小など）が見られる。サンイルについては、故郷に残り、否応なく関与せざるを得ない子孫と向都離村した子孫との間で温度差がある。前者が高齢化して墓の維持に危機感を持ち、経済的余裕が生じたことで、この時期、Yマウルのサンイルが活発化していると指摘する。

結論では、各章の要点を述べ、本書の成果として、①17世紀朝鮮社会以降、長期持続の様相として把

握される小規模自営農の再生産戦略と村落の平等的共同性の再生産が、実は暫定的均衡に向けた実践であるとして捉え直したこと、②1960年代中盤以降、産業化過程での家族と村落の変化を暫定的均衡の再編成として捉え直したこと、③Yマウルから見出した家父長制的関係性の揺らぎを発見したこと、とまとめる。そして本書が、時期と場所を異にする民族誌を相互対照する方法をとることで「断片的な民族誌資料に対して、その独自性・特殊性をより厳密に同定しつつ、普遍性・一般性の高い理解を模索することの一助たりえた」（446ページ）と述べる。

III

以上の内容理解を踏まえて、若干、コメントしていこう。

まず、本書の圧巻は、何よりもYマウルにおける著者の1980年代末の滞在調査によって明らかにされた部分である。Yマウルを構成する各戸のライフストーリーをもとにした植民地期から産業化以前における就農・就労状況、村外での就学や就労状況、これらの結果としての家族編成の変化、そして1980年代末時点でのYマウルの各戸の実態を詳細かつ具体的に描き出している部分である。著者は、この聞き取り調査結果をただ記述するのではなく、朝鮮後期の農村社会の歴史人類学的研究および社会経済史的研究、また1970年代以来の人類学上の先行研究との比較対照を踏まえて考察している。この方法のため、労力のもっとも伴う著者自身の調査結果は各章にちりばめられている。しかし、上の内容紹介でも述べたように産業化以降の農村社会についてYマウルの事例をもとに論ずる6~9章では著者の調査結果がふんだんに利用されて描き出されている。

最初に述べたように、わたしは経済学的研究方法をとり、韓国人研究者による農村の実態調査も参照したが、基本的にマクロ的な把握の研究であった。著者、本田氏の研究はこれとは対照的にマクロ的な研究も多少利用するが、あくまでもミクロの実態を精緻に分析した研究である。わたしにとってはマクロの研究で看過しがちなミクロの実態を提示してくれているのでたいへん興味深かった。例えばこうである。

1970~80年代における農村変化の最大の要因は

農村からの人口流出である。それはもっぱら若年層を中心に起こっており、その結果、農村における高齢化、農業労働力の量的不足と質的脆弱化をもたらした。これらはマクロの統計データからも明らかにできる。わたし自身は農村人口流出の時期的推移（1960年代後半に増大開始→1970年代前半に漸増→1970年代後半以降急増、零細農・貧農の世帯流出→全階層の若年単身流出）を農家経済のマクロ的変遷（これを規定した米価政策などコメ政策を加味して）との連関で解釈・説明した。そこにおいて把握されたのは一方通行的な向都離村の様相であった。しかし、本田氏はYマウルにおける環流的再移住の実態があったことを示してくれる。

もうひとつ示せば、1980年代以降になって顕著になった農業労働力不足への対応について、機械化普及の水準が低かったこの時期、各農家は保有する量的・質的労働力に見合った農地の移動、すなわち農地の賃貸借＝小作によって解決したこと、それがこの時期の小作関係の増大（加えて耕地規模の中農標準化）となって表れたことをわたしは示したが、小作関係の具体的実態の把握はじゅうぶんでなかった。この点でも本田氏はYマウルの実態を示している。農繁期（田植・収穫）の共同労働、機械化について、わたしは前者が緊急的な対応であったに減少していること、そして後者の進展によってそうした共同労働は取って代われつつあることを指摘した。本田氏はそれらがどのように具体的に実現しているのかを示している。とくに機械賃料が低い水準に決定されている実態を示し、それがある種のコミュニティ感覚が働いた共同体規制であると解釈しているが、なるほどと思う。小作契約における料率はこの時期、低下の傾向を示した。これについてわたしは、農地賃貸借の需給関係（離村の増大による離村者の小作地供給の増大傾向）で説明した。本田氏の著作にこの点の言及はないが、ここでも共同体規制が働いていた可能性がある。農村における経済的現象は経済論理だけでは解釈できないことを改めて教えられる。

繰り返しになるが、本田氏の問題関心は、農家の家族再生産の仕方、村落コミュニティの維持の仕方にある。これについて本田氏の結論はきわめて妥当である。つまり歴史的にも長男残留規範は一義的で

なく、典型的には中間的な小規模農で見られるに過ぎず、産業化を経ると、かつて富農層で可能であったメリトクラシー志向的向都離村が普遍化して農業経営は道具化・手段化し、中間的な小規模農においても長男残留規範が插らいでしまった、と論じるが、わたしもこれにまったく異議はない。ただ、わたしは、産業化を契機に、農業経営がいつも簡単に道具化・手段化した背景に関心を持つ。これについては農業経営、あるいは農業労働を社会的に評価しない価値観が働いているのではないかと考える。農家が、家としての継承を何よりも祖先祭祀の継承と考え、農業経営の継承を二次的にしか考えていないのではないか。祭祀権は長男単独継承が強固に守られても、農業経営の長男残留規範が強固でないのも、そうした価値観と関係があるのではないと思われる。

つぎに述べることは、ないものねだりの指摘である。第1点は、本著作における考察が、1980年代末の時点にとどまっていることである。それは著者自らが調査をしていない時期まで言及することを自制した、研究者としての真摯さ故と理解できる。しかし、調査当時からすでに四半世紀を経た現在、著者の問題関心の対象である農家の家族再生産の仕方、村落コミュニティの維持の仕方にその後、どんな変化があったのか。ほんの仮説的、問題提起的でも著者の見解を知りたかったという点である。第2に、1980年代末は、産業化を経ただけでなく、民主化という大きな社会変動を経た時期でもあった。こうした社会変動が農村社会にどう作用したのかという観点での考察があったらと思った。わたしの問題関心から付け加えると、この時期は、韓国のキリスト教が急速に普及した時期でもあった。Yマウルでもひとつ教会ができたことが示されている。祭祀において一部、キリスト教式で行われている世帯のあることも指摘されている。Yマウルの喪扶契のことで、教会の牧師の不参加をめぐる問題があったことの指摘もある。このような1980年代の政治・文化（宗教）の変化に伴う農村社会の変化についても本田氏の見解を聞きたかった。今後、課題としていただければ幸いである。

（横浜市立大学名誉教授）